

先週の礼拝メッセージ(2022年4月10日) ベン牧師

### 「王なるイエス」 マタイによる福音書 21:1-11

今日は棕櫚の聖日です。イエス様がロバの子に乗って、エルサレムに入城された時、人々は道に木の枝を敷いて熱狂的に迎えました。昔、中東では、新しく占領した町に、王を迎え入れる時に、王の通り道に木の枝や自分の上着を敷いて、そこを歩いて王が町に入るという習慣があり、今日の出来事がまさにそれに当たるわけです。

さて、この棕櫚の聖日から受難週が始まるわけで、キリスト教にとっては特別な日、そして特別な一週間です。

イエス様のことを、イエスキリストと呼びます。教会もキリスト教会と、キリストという言葉を使います。キリストとはギリシャ語です。ヘブル語ではメシア。その意味は「油注がれた者」ということです。どういう人が油注がれたかということ、預言者、祭司、王です。これらの任に着く人は、文字通り大祭司から頭に油を注がれてはじめて、正式にその地位が公に認められるのです。

聖書が指す救い主とは、預言者であり、祭司であり、王であるという三つの役割を持った人です。イエス様は3年半の公生涯において、預言者として父なる神の言葉を人々に教え、祭司として人々を癒し、取りなしてくださいました。しかし人々は王としてのイエス様を見ていなかったの、まだイエス様を救い主としては認められないという思いがありました。

そのイエス様が、エルサレムにロバの子に乗って入られたのです。実は、メシアがロバの子に乗って来られるという預言が旧約聖書に記されています。(ゼカリヤ 9:9)

ですから、人々はイエス様の姿を見て、王として来られたと狂喜し、道にシュロの葉や上着を敷いて迎えたのです。預言者、祭司、そして王として、イエス様がメシアとしてのご自身を表された大きな出来事が、今日の棕櫚の聖日なのです。

しかし人々のメシヤ観は、ローマの支配から自分達を救い、ローマを力で滅ぼしてくれるメシアでした。一方、律法学者や国の指導者たちは、イエス様の行為をやめさせようとしてしました。なぜなら、当時ローマの支配下

にあったエルサレムに王を迎えるということは、ローマへの反逆罪とみなされるからです。

ですから、この日を境にイエス様を殺す計画を実行へと移していきました。遂にイエス様は捕らえられ、裁判のためにローマの総督ピラトの前に引き出されました。あれほど熱狂的にイエス様を迎えた人々は、あっけなく捕らえられたイエス様を見て、自分達にもローマからの咎めがかかることを恐れ、ホサナと叫んだ同じ口をもって「十字架につける」と叫んだのです。

もちろん、イエス様は王としてエルサレムに入ると、こういう結果になることはご存じでした。ですからエルサレムを見渡してこう嘆かれたのです。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」(マタイ 23:37)

それでも、イエス様はご自分が王としてエルサレムに入ることで、私こそがメシアであるとはっきりと示され、十字架に向かっていかれたのです。イエス様はこの世の王ではありません。やがて復活され、天にてすべての権威を持ち、御国の王として私達を治めて下さる王です。

そのためには十字架に突き進んでいかなければならなかったのです。十字架こそが私達の罪を赦し、死にさえも勝利できるものだからです。その道を開くために、あえて王としてのご自分の姿を公に示し、それが十字架へとつながっていくのです。しかも、十字架の死で終わらず、3日目に死を打ち破って復活されました。イエス様を信じるなら罪赦され、永遠のいのちが与えられるという、これ以上ない恵みをすべての人の与えるためにです。

私達も、この受難週、イエス様の通られた苦難を思い、それが私の罪の赦しのためだったことを感謝し、勝利の復活までの日々を感謝と祈りをもって過ごしましょう。

